

月日: 2021年 7月 19日 (月)	時間: 15:00~17:00	場所: 福岡市科学館 6階 サイエンスホール
----------------------	-----------------	------------------------

出席者:

&lt;外部評価委員&gt;

- 伊藤 克治 福岡教育大学 理科教育ユニット(化学)教授
- 栗原 隆 シンフォニックアソシエーション 代表
- 縣 秀彦 自然科学研究機構国立天文台 天文情報センター 准教授 普及室長・国際普及室長
- 緒方 泉 九州産業大学 教授 博士(文学)

&lt;事業者&gt;

- 板里 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 代表取締役
- 矢原 福岡市科学館 館長
- 高安 福岡市科学館 PJアドバイザー
- 高橋 福岡市科学館 事業総括責任者
- 吉武 福岡市科学館 事務局長
- 丹野 福岡市科学館 ドームシアターリーダー
- 小堀 福岡市科学館 ドームシアター担当者 (敬称略)

配付資料: 福岡市科学館年報-2020年度版-  
外部発表資料

## ■議事内容(概要)

### 1. 委員長の選出

要綱第3条にもとづき、委員長を互選の結果、満場一致により縣氏が選出された。

縣委員は東京からリモートで参加された。

### 2. 2020年度事業報告

事業者から、年報および参考資料に基づき前年度の事業内容等について報告。

### 3. 委員意見交換・評価等

事業報告を受け、各委員から意見や評価、提言等が出された。

科学館からの情報発信、コロナ禍ならではの運営を工夫しており、変化に対する対応が早いと感じた。方法を工夫しながら実際の体験を大切にしている姿勢に感動した。コロナ禍を考慮せず設定した目標に対し51%という実績は評価できる。変化に対して果敢に挑戦していく姿勢自体が、科学者として変化の激しい世の中で課題にどう立ち向かっていくかという姿勢を育てるんだというメッセージのように感じ、非常に勇気づけられながら館の発信するYoutubeやFacebookを見ていた。

新学習指導要領では、博物館を活用した学習を先生方をお願いしているところですが、今後、ギガスクール構想のもと、一人一台端末で博物館と学校が連携しやすくなる中で、博物館が学校に対して調べ学習としてどのようなコンテンツを提供できるかというのが重要になる。この期間でその準備をどれだけできたかが問われてくる。職員だけで作るのなかなか難しいので、コンテンツ作りはどうしても制作会社とのタイアップが必要なので、費用はそれなりにかかると思う。コロナ禍で、ハンズオン展示がほとんどできないなど、博物館の楽しみ方を改めて考える時間を持つことができた。来館できない人たちにどう繋げるのか、全国的・世界的に様々な発信がなされ、国際シンポジウム等でも博物館が持つ資源をどのように将来にわたって大切に考え、市民へ繋いでいかに焦点が当てられている。この館でもスタッフ達が市民と繋がるようとする努力をしているから、人々が途絶えずに来館しているのだと思う。

アンケートで大人向けのスペースを希望するという意見があったが、20代-50代の大人の回答が増えており、大人も楽しみたいと思って来ているのだと思う。「本質を探りたい」志向や物事の起源を解説するようなもの、今あるコンテンツを少し深掘りすることなどが大人にも喜ばれる。

ダーウィンコースの取り組み大変興味深い。活動は数年にわたり進めるものと理解したが、今の対象年齢層への取り組みも大事だと感じるが、今後、高校生以上をターゲットに現行プログラムを発展させる意図や別企画をする予定はあるか。

中高生向けの企画としては「未来研究室」でいろいろな方のお話を聞いて中高生自身が感じるところがあれば、科学館にも積極的に関わってくれるのではないかと行動を起こしてみたが、結果的にはなかなか難しかった。

ダーウィンコースは小学生単独ではなく家族(親子)が対象となっており、そこが受けている。これからの社会は家族で一緒に考える形に変わろうとしていると感じる。これを中高生に転化できないかと考えている。

発言者

伊藤委員

緒方委員

栗原委員

縣委員長

板里

繰り返し深めていくと、広く一般化標準化して全国・世界へ発信できるコンテンツに育つ可能性があるのでは。小中学生くらいから始める重要さは理解するが、市場というか世の中のニーズとしては高校生に対しての取り組みが難しく、もう少しワクワクする主体的興味を持てるコンテンツをうまく教材副教材にしていくというのはとても可能性があるのではないかと。  
SDGsを早速取り入れているところに先進性を感じるが、もう一つの大きな流れであるSTEAM教育を実装している感もある。STEAMをもっと前面に出すと学校や社会からの関心を集める上でもよいのでは。「ギガスクール構想」や「ソサエティ5.0」も大きな注目点となっている中で、最先端を走っている。

県委員長

関連して、ダーウィンコースは重要だが、中高生をどう巻き込むかは、博物館界の長年の課題。他の事例から、中高生は潜在的に科学館博物館に興味を持っているが、そこに対して科学館・博物館側が十分にアプローチができていなかった。中高生からすると大学や大学での研究に興味はあるが、どう繋がっているのか分からない。動かせる要素はあるので、うまく仕掛けられれば大きく動くかと予測される。  
昨年度の委員会でも、サイエンススクールを館でやったら良いのではないかと意見が出ていたかと思うが、例えば国立科学博物館や熊本博物館等が実施している「博物館の日」のように、館イベントにサイエンススクール、科学館関係の様々なブースを設け、そこに高校生が来る、となると教員も生徒に博物館利用を勧めやすくなる、といった連続性が生まれてくる。そのためにもやはり研究を前に出すことは非常に有効。

緒方委員

ダーウィンコースは、中高生の方が組み立て易いが、館のボリュームゾーンが小学生であり、中高生は交流室には来てくれるが、なかなか企画に参加してくれないという現実、また、10年後の科学者を育てるという長期ビジョンがあったため、まずは小学生対象としてスタートした。現在継続参加者と中級コースに進んでいるが、育った元小学生が中高生になった時にチューターとして指導する側になってくれたらという期待もある。

矢原

中学生になると学校のクラブ活動が必須化しかなり時間をとられる。現在受講中の小学生もクラブ活動と塾とお稽古事などをとてがんばっている上で更に受講している。  
SDGs家族会議でも中学生はいつも遅れてきたり、参加できない日があったりという状況がある。ここをどうしていくかがこれからとても大きな課題である。ぜひアドバイスいただきたい。

高校生になると大学が既に用意しているプログラムもあるので、それと科学館スタッフのコミュニケーション能力を活かして科学の面白さを分かり易く伝えるなど、いろんな可能性がある。そこに持って行くまでの中学校というのがなかなかハードルが高いと感じている。

中高生は確かに忙しい。先の事例では高校生も午前中に課外があるので14時以降スタートであれば参加できる、冬休みも正月明けに実施日を設定するなどした。中高生の実態に合わせてプログラムを構成することも勝負どころ。

緒方委員

当館ではいち早くzoomなど新しい仕組みをつかったプログラムを実施した。海外の大学におられる西村先生との「未来研究室」などキャリア形成も視野に入れた内容は、これからの科学館の方向性の一つ。

高安

九大共同研究でのダーウィンコースのプログラムの作り方は大変贅沢で、1回の実施内容について准教授や教授7-8人が4-5回打合せに参加して大変きめ細やかに作り上げられている。ここまでの取り組みは全国の科学館でも他に類を見ない。どうしても研究に偏りがちなところに当館の場合はS+Cのコンセプトもありデザイン思考・アート思考の考えを科学教育の中に何とか入れようとしている。科学館では従来やられていない社会的な活動にも繋がるようなことをできるだけ実践していこうとしている。  
一見先端的なことをやっているように見えるのは、そういうこともちゃんとやっているからではないか。

ワークショップを以前からよくやっていた。コミュニケーション型のことを志向して取り組んできた館だったからzoomでのオンライン対応もできたということと、もう一つは設置当初から地域連携・大学や産業との連携に力を入れてやってきたので、今回のような成果につながった。設置の理念とか最初の組織の形態とか優秀なスタッフを集めてさらにスキルアップをしてきたことが、コロナ禍で可視化された感がある。

県委員長

これから学校の学びはSTEAM的な発想で教科横断的な学びや探究的な学びを大事にしていこうとしている。学校教育現場から見るとお手本の取り組みといえるが、その価値がなかなか伝わりにくいことが懸念される。  
来年度からの高校の新学習要領でも「理数探究」という科目が新設されており、たとえば鞍手高校等の文科省の指定を受けたスーパーサイエンスハイスクール(SSH)校との連携実績が1つでもできると、他の学校もやってみようという声が多く上がるのではないかと。SSH校であれば、ダーウィンコース的なものも学校の教育課程の中に組み込んで実施できる。しかも国からは理系に限らず文系についても探究的な学び推奨されている状況でもある。福岡市科学館がアート思考を入れた文理融合的な学びを教育メニューをつくり実装化したとなれば、全国に誇れる先行事例になりうる。

伊藤委員

探究的なプログラムの取り組みとして「美しい虹をつくろう」プログラムを昨年実施した。虹はどうできるか、を知るだけで終わらず、ワークショップ形式でチームごとに自分たちで虹を作ることに取り組み、一番美しい虹をチームごとに発表する、というデザイン思考を取り入れた内容で実施した。  
良い内容になったと自負しているが、終わった後に「いい内容ではあるが、数がはけない(受益者が少ない)」という評価もあった。ダーウィンコースも子どもたち5人に対して先生方が6人と手厚く手間暇をかけて実施している。中学高校の複数の現場でも取り上げられるようになるには、スタッフ・指導者の育成、外部との連携などによって効率の良いプログラムを作っていくかなければならないと感じる。

高安

p13アンケート結果 平均と分散があるのが分かり易くとも良い。宇宙ゾーンが平均点も高くばらつきもなく4つのゾーンの中で圧勝している感がある一方、他のゾーン、特に生命ゾーンの一部展示物は評価がかなり分散している。宇宙ゾーンが良いのはスーパーラージスケールを鳥瞰でき、しかも簡単な操作で自分でハンドリングできる展示が多いところで、非常に楽しく、面白い。評価が分かれた生命ゾーンでも、細胞の中や今話題のmRNAなどマイクロの世界で起きていることが体験できるように見せられると、宇宙ゾーンに負けない魅力がある。物事の奥底で何が起きているかを見せることが新たな生命ゾーンの肝ではないか。

栗原委員

中高生が勉強のスペースを借りに来るが科学館に来ているわけではない様子を見ていて、科学館の本来のあり方に加えてその他にもやっていかねば成り立たないのではないかという思いから様々な事業を始めた。新館長にもなり、ダーウィンコース等で中学高校のキャリア形成担当の教員の方からもお話を聞き、科学館としてどのように手伝っていけばよいのか、委員の皆さまからも新しい科学館構想についてご意見いただきたい。10月からの新しい未来研究室についてご説明するのでぜひご意見いただきたい。

板里

昨年度までの一方向から双方向の講座へ進化、zoomを使ってシリコンバレーの起業の変化と科学館を繋ごうと、福岡市のスタートアップ事業との連携を視野に入れている。大学生から社会人を対象にと考えていたが、今日のお話を聞いてやはり中高生くらいから自分の考えを事業化することを意識づけた方がよいのではないかと認識を新たにした。できれば高校生から対象にしたスタートアップの講座にしたい。興味があった参加者は福岡市のスタートアップ事業のバックアップを受けられるような流れも含めて、今年度の内容を計画中。

高橋

一つのきっかけとして広範囲にやっていきたいと考えている。前提としてあるのは、学問を掘り下げるだけでなく、いろんな分野を知り物事に興味を持つことの支援が当館のこれからのチャレンジ。引き続きいろいろチャレンジをしながら、変わっていく社会や生活に対応した科学館のあり方を検討していきたい。

板里

基本展示室アンケートは、意味が分からないものが分散率が高い。今回のリニューアルではこのアンケート結果を重要視しており、学習内容を高め、理解力を増すことを重視している。エジソンカーなどモノはとも良いが意味を説明できていない。説明していないため伝わらず低評価が増えている。サイエンスコミュニケーターがきちっと説明をすれば分散率は下がると思われる。

高橋

もともと、展示室にはあえて説明を多くせず、疑問に思ったことはサイエンスコミュニケーターに尋ねたり、4階サイエンスナビでの自発的な調べ学習で深めるという建付けで構成しているという設計時の意図もある。

吉武

生命ゾーンがもっと充実するとSDGsやフィールドワークに繋がっていく。例えば「マイクロの決死圏」の枠組みを使うと面白くなるのではないか。フィールドワークの昆虫の動きを撮影するもの(年報P31)も興味深かった。子どもたちが何を撮るかで、興味がどこにあるかが分かるので、是非見てみたいと思った。

栗原委員

写真を撮ったあとに、撮影者がポイントを伝えてどれが良い作品かコンテストもした。当館のコンセプトのS+C(サイエンス&クリエイティブ)のクリエイティブを重要視して、自分が撮影したものについて、なぜそれを撮影したか、どこがいいと思ったか、など自分の興味を表現し他者に伝えられるようになることを狙った。

高橋

主旨は分かるが、むしろ対話型の方がより良い。「なぜそれを撮ったの?」と対話をとおして掘り起こしてあげる必要がある。対話型のフレームワークを入れることで、表現方法などにも気づくことができる。

栗原委員

対話型という点では、ダーウィンコースの「街」の回で大濠公園の魅力を写真に撮り、いちおしの写真を選びなぜ自分はそれが良いと思うかを紹介した後で、グループの中でまた良い写真を選ぶ中で受講生同士が違う考え方や違う部分に良さを見出すこともあると知る機会をつくった。最終的には保護者も含めた皆で点をつけたものを主成分分析にかけ、「皆が良いと思う評価は確かにあるが、それとは別に、好みが大きく分かれるがどちらが良いとは決められない基準もある」ということを実感できた。かなり対話型の内容だったと自負している。

矢原

デザイン思考を取り入れる際に、考えたことを紙に書いて…という作業をすることはよくあるが、フィールドワークをして実際に見てきたものと組み合わせるのはとても良いと感じた。

栗原委員

ドームシアター(プラネタリウム)について、コロナ禍で思うように放映ができなかったり、年報p23記載のようにスケジュール変更等を余儀なくされた。

吉武

全国の施設の苦労も聞いている。シートを拭いたり感染防止策は非常に重要だが大変なのではないか。

縣委員長

昨年4月は3回放映まで減らすところから対策を開始した。当時は一放映ごとにドアを空けて換気をするなどしていたが、施設の換気能力が確認できてからは、7月からは続けて放映をしているが館全体の縮小運用で現在も回数は減らしている。座席・手すり等には抗菌加工をしている。加工後は座席の拭き上げに代えてアルコール噴霧をしている。

丹野

ドームイベントも例年と変わらない数おこなわれており、天体観測会も多数実施されている。コロナの中でも成果を挙げられていることがよく分かった。

縣委員長

館全体のコロナ対応も成功していて、クラスターなどは発生していないという理解で宜しいか。

吉武

全体のリニューアルの話もあったが、プラネタリウムのオリジナル番組は中核になってくると思うので、大変だとは思いますが企画の時間を業務内でしっかり確保して調査研究をしながら、良いスタッフと良いシナリオを今後も作っていただきたい。今後の方針や具体的な構想などあるか？

縣委員長

やはり宇宙研究の動向にはある程度沿うものでありたい。  
例えばハッブル宇宙望遠鏡が次代のジェイムズ・ウェッブ宇宙望遠鏡に代わるタイミングで、ハッブルのこれまでの実績と今後のバトンタッチといった話題や、昨年制作したロケットの番組も、火星を目指す計画が現実味を帯びてきているなか、まずは子どもたちにはロケットの構造を紹介する番組だったものをステップアップしていくなど。  
但し、来館する子どもたちの年齢層は大きく動かず、2-3年経つと入れ替わるため、基本は基本としておさえつつ計画していきたい。

丹野

若田名誉館長をはじめご当地ものなども企画されるといいと思う。中には館内の展示物と連動したりイベントと関連性があるなど一体感が更に出てくると良いと思うので、どこの館も苦心しているところではあるがチャレンジしてほしい。

縣委員長

少し先になるが、はやぶさ2帰還カプセルの巡回展の際にはプラネタリウム番組や館内のアクティビティも関連するものを実施するなど計画している。

吉武

プラネタリウムはSTEAM教育と相性がとても良い。星空にすぐに星座図を重ねて映すのではなく、地域による違いを見せたりするなど、プラネタリウムとデジタルの組み合わせでSTEAM的なものを上手に表現できるとよいのではないかと。

栗原委員

コロナ対策の面では、毎月のスタッフ向け全体会議で、館長にワクチンのことなど講義して頂いている。

吉武

自身は植物学者であり人間のウイルスの専門家ではないが、昨年2月頃から情報発信などしてきた。  
ダーウィンコース対面実施時にも確認したが、当館の換気性能は大変高い。手指消毒の徹底なども呼びかけている。  
福岡市の新規陽性者の傾向を毎日確認、回帰分析して注意喚起している。  
最近の取り組みとしては、一部の対面プログラムで唾液による抗原検査の実施もしている。現状では館内でクラスターが発生するようなことは避けられると思う。微熱・咳など軽微でも体調に異常がある場合、スタッフの出勤や来館者の来館を避けることが現状では最も肝要。

矢原

ネットでたくさん繋がるようになり、ギガスクール構想で子ども1人1台端末が普及してきている世の中で科学館の果たす役割について。間違った情報もたくさんある中で、科学館から発信されるのは信頼性の高い情報という意味で価値がある。もう一つ、断片的な孤立した情報だけではなく、科学館のプログラムや各展示、サイエンスナビのシステムなどで情報を繋いで一つの文脈をつくることができ、科学館から発信されることにも非常に価値がある。  
世界的に見て日本の子どもたちは、遷移する情報から必要な情報を汲み取って、一つの根拠をもとに結論を出す力が弱いと言われている。そういうところを育てる、力をつける意味で、科学館とオンラインで繋ぐこともあるし、ここに来たからできることもある、その両方を大事にしていきたい。ネットが普及して、どんな情報でも手に入ると言われているが、やはり科学館は大事な場所である。

伊藤委員

また、デジタルとアナログの融合がうまくできていると感じる。どうしてもブラックボックスになりがちなデジタルを、その仕組みをプログラミング的思考で学んでいくという要素が学校教育にあるので、その考え方を科学館で学ぶことができるというのは価値が高い。前述の子どもたちの対話的学び合いについても、いま学校教育で言われている『「個別最適な学び」と「協働的な学び」』の一体的な充実が既に実装化されている。学校教育から見るとお手本になるので、教員研修などの場でうまくリンクできると良いと感じた。

ダーウィンコースについては、2025年の大阪万博に向けた「EXPO2025共創チャレンジ」にも登録しており、今後積極的に全国や世界に情報発信していこうと考えている。  
受講者と同数程度の指導者が必要で、館長の尽力で子どもの教育に関心の高い先生方が集まっていたり、今後学校教育との連動もどんどんしていきたいが、講師をどう育てるかという難問にあたっている状況。  
また、良い報告のできるプログラムは少人数を対象に長時間をかけて実施しているものでもあり、来館してくださっている利用者数と比較すると、プログラムに参加できる数が非常に少ないという問題点を十年かけて改善していきたい。お知恵をお借りしたい。

高橋

もうひとつ、これから学校教育と博物館・科学館とがどう連携していくか、が今の大きな問題になっている。興味はあるが他の予定があり参加ができない、など学校との連携の内容や可能性の整理が必要と感じる。科学館から何をしたいかの情報がうまく発信・広報できていないとも感じる。館単体での発信には限りがある。学校に情報発信してもらう連携できていないと感じる。博物館・科学館が学校とどう連携していくのか、共存していくのかというのが大きなこれからの課題。一人一台タブレットを持ったからといって、それを持って科学館に来るわけではない。

板里

外部発表について、今回非常にバランスが良く、特に参加者と一緒の外に出ていくという事例も多く、例えば針谷職員の水をテーマにした館内の展示物を起点として横断的に考察するフィールドワークや、丹野職員によるプラネタリウムから野外の星空を想う文章など、科学館が世界の縮図であることを改めて実感させられた。板垣職員の報告にあった館のプラットフォームを使って参加している子どもたちの間で年長者が小さい子に教えるといった創発教育がおこなわれていることなどにも感銘を受けた。

栗原委員

科学館の実施したプログラムのうち、交流的なねらいのあるものが開館準備段階で教育普及事業全体の8%、2018年度の実際の参加者数では総入館者数の約2%の方が参加型の活動に参加されている。ダーウィンコースのような本当の意味で細かなプロセスまでも交流的・探究的な学習ができている人は、人数レベルで見ると来館者全体の0.2%と非常に限られている。

高安

もっと効果的に多人数に提供できる質の良いプログラムを、実際に多く提供していくことが大きな課題である。

ダーウィンコース資料p6自制心(実行機能)を育てるとはどのようなことか？

栗原委員

人間の協力行動というのは生物界全体にとっても特異な存在だが、協力行動を支える人間の性格因子5つのうち3つは周囲の環境と関係している。周囲(他者)の信頼を得ながら自分の行動を変えていく時のコントロールシステムが自制心。自制心が高い子は将来どのような職業になっても成功する可能性が高いという研究結果もあり、自制心を身につけるといことを科学館の取り組みの中でも大事にしている。

矢原

ダーウィンコースのプログラムの中でも、少し我慢して繰り返しチャレンジしてスキルを身に着けることや、具体例だと魚の3Dモデルを作るために何百枚も写真を撮る必要があり、たくさん撮れば撮るほどきれいな3Dモデルが完成する、などの取り組みを通じて、自分が関心を持ったことを一所懸命にやってみると自制心を高めることをねらいに挙げている。

学校教育で言うと、観点別学習状況の評価の一つ「主体的に学習に取り組む態度」に繋がる。「主体的に学習に取り組む態度」は「粘り強く学習に取り組む側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の二つの側面から評価しており、まさにお話しにそのまま当てはまり、教育的視点と生物学的な視点で目指すものが一緒というのは興味深い。そこを大事にしているというのは学校教育との関係性の上でも価値があり、学校教育への波及効果も高いと思う。

伊藤委員

館で教員向けの研修会をすべき。九州大学と連携しているのであれば、教員免許状更新講習などを九大が主催となり科学館を会場とするなどすると、教員がこちらへ集まり館の機能を知る機会になる。スーパーサイエンススクールの発表会を館ですることについて、伊藤委員も以前から続けて提案されているが、もうそろそろ実行してもいいのではないかと。学校と館を繋げる策を一步踏み込んで取る時期に来ている。

本外部評価委員会に、福岡市の職員が一人も来ていないのはよくない。指定管理者制とは言え、主幹部局からは来るべき。市教育委員会の方にも参加してほしい。今後入ってもらえるようぜひ働きかけを。せっかく良い議論をしているのに市・市教委に来てもらえるよう、館から要望を上げる必要がある。市の関係者の参加がないと、学校現場一つ一つへ周知していく際にも威力が弱い。

緒方委員

福岡市科学館として一定の役割が固まりつつあり、設置理念を十分に体现できるプログラムも、職員が頑張っているからできるようになってきた。次のステップとして福岡市全体の学校教育、市民に対してどう伝えていくのかという段階では福岡市をもうちょっとうまく絡めないと進みにくいのではないかと。

学校教育、特に理科教育における対話型・探究型の学習をする場合にはサイエンスコミュニケーションの方法は非常に有効だと思うが、先生方にはなかなか伝わっていない。当館でもぜひ教員のためのサイエンスコミュニケーション講座を実施していきたい。

高安

県委員、伊藤委員にはぜひ理論的な根拠をご教授いただければありがたい。

p8組織体制より、運営を担っている指定管理者の下に外部評価委員会があることで、今回のような市不在の状況となっている。

科学館の活動を更に実装していく大事な話をしていく上では、行政、指定管理者に対してもう一つ三角形を形づくる要として市民代表・有識者代表による評価機構をつくって、行政に対してきちんとフィードバックをかけていく仕組みを作らなければならない。

縣委員長

組織構造上、設置が教育委員会ではないための弱点のある組織体制になっており、改善していかないと実装はかなり難しい。指定管理者に我々外部評価委員の意見を伝えても、今回出た話のいくつかは、行政に言わないと動かない話が含まれている。

他館の例では、同様に指定管理者制度の場合でも、行政に対して対等の立場で勧告する組織をつくっている科学館もある。数は多くないがうまく機能して、科学館が厳しい時にそれで立ち直った事例もある。

こういったことは現在は福岡市のどなたにお伝えすればよいか。開館時の担当者はまだ部署におられるか。

指定管理者ではなく委員の皆さまにお願いしたいが、市長・副市長・教育長あたりとパイプを作らないと、根本的なことが解決しない。

いかにいろんなところとうまく繋がっていくか、そしてここにあるいいものを実装化していくかがこれから大事になると思う。できる限り協力したい。

伊藤委員

ダーウィンコースの初級が小学校4年生から6年生を対象として自制心を育てていることに感動した。感性は働けども知性は未だ機能せずという年代に、知性を機能させる瞬間を育てることなのかと思う。一般に5歳頃から発達し始める自制心だが、幼児期にうまくいかなくてもこの小学校4年から6年の間にもう一度この自然観察によって自制心が育まれるというのは、大変すばらしいことと思った。

栗原委員

次のステージに向かっていく科学館を楽しみにしている。  
今後どういう取り組みをしていくのか十分に協議して行っていただきたい。  
継続的に外部に発信していくコンテンツはぜひ作ってほしい。

緒方委員

#### 4. 委員長総評

- ・事業報告をお聞きして、コロナ禍で大変ななか、ご苦労が多かったこと、それでも大変な努力のもと達成率50.3%という成果を達成されたことを理解した。
- ・アンケートについて、ネガティブなものについて丁寧に見てはどうかという前回前々回の意見を汲まれていた。寄せられた意見については、さほど大きく気にするべきものはないように思うが、今後大幅なりニューアルを控えているとのことなので、有料ゾーンと無料ゾーンの識別や動線を分かり易くする表記するといったことは対応可能なのではないかなと思う。いろいろなお客様がおられるので一部の意見への対応に心血を注ぐ必要はないと思うが大人向け、子ども向けイベントを可視化することなどは良いのではないかな。
- ・広報・情報発信を館自力に頼むのではなく、行政によるアナウンスや地元メディアと連動するなどということも必要。
- ・展示更新大仕事かと思うが、工夫されていることがよくわかり、楽しみにしている。
- ・SDGsを取り入れたり、様々なトレンド・ニーズに合わせて科学館がいち早く動いていることに感銘を受けた。今後も引き続き取り組んで行っていただきたい。
- ・地味なところだが交流室の改善は極めて重要と考える。初めて訪れた際に自学自習できるスペースがあり、そこには他館には居ない中学生高校生がたくさんいて、これは宝物であり、ビッグチャンスと感じた。改善は大変嬉しかった。
- ・今回の会議も含め、今後もオンラインイベントは多いと思うが、マイクの使い方が重要、少し研究してほしい。

縣委員長

コロナの後を考えると、今後地方分権が進み東京一極集中はなくなってくることは明らか。  
学校教育などは市区町村に裁量権があるため、科学館行政や科学館運営が他都市の先駆けとなりうる。だからこそ面白く、社会的にも大事な局面をアフターコロナで迎える。  
福岡市科学館は学校や企業との連携が非常に進んでいて、まだまだ不安点はあるかもしれないが、今後も発展していく可能性が高いので、館の活動や試み、すばらしい成果が福岡市のみならず他にも波及していくことを目指して行っていただきたい。  
東京で昨年開館した科学館などでも、福岡市科学館のコンセプトや成果が活かされていると感じた事例がある。今後リニューアルを予定されている館でも活かされる可能性があると考え、更にモチベーションが上がるのではないかな。ぜひ良いところをどんどん伸ばして行っていただきたい。

但し、最後に言いたいことは、やはり何と言っても忙しくなってしまうと思う。今までの運営や来館者対応もしながら、オンラインイベントもやらないといけなく、ギガスクール構想でタブレットも繋げないといけなくという時代が来たら、パンクしてしまう。予算も人もそんなにたくさん増えるとは思えない。と言うことは、バランスをとって、要らないことや少し削ってもいいことは削りながら、新しいことをやっていかないと、つぶれてしまう。  
職員の皆さんが一番大事なので、職員の心と体の健康、バランスをとった運営を一番大事にして、今後も更に発展していただきたい。